

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820003

研究課題名（和文） 仏像を納める荘厳具（厨子）に関する調査研究
-古代・中世の仏像観を主眼に研究課題名（英文） Study on “Zushi” as a vessel which dedicates a Buddha statue
-Mainly research on the concepts of bodies in Buddha statue

研究代表者

海野 啓之 (UNNO HIROYUKI)

東北大学・大学院文学研究科・助手

研究者番号：80587759

研究成果の概要（和文）：本研究では、仏像を納める容器である厨子について、その意匠構成を分析することにより、仏像を中心とする一空間が体现する宗教的意味や機能への理解に迫ろうと試みた。また仏像の内部空間も研究対象として、胎内仏、納入品の考察をおこなった。さらに文献資料の検討を通じ、仏像の安置状況とそれにともなう宗教的意味づけの変遷を跡づけた。

研究成果の概要（英文）：These studies consider “Zushi” as a vessel which dedicates a Buddha statue, in particular, focusing on the composition of each motif, in order to understand the religious meaning of the space centering on a Buddha statue. These studies also considered the relation between a Buddha statue and the thing to dedicate into it. In addition, these researches analyze about changes of the installation situation of a Buddha statue by investigating history data, and deepened an understanding about the concepts of bodies in Buddha statue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：厨子、仏像、荘厳、空間、仏身、納入品、弥勒

1. 研究開始当初の背景

(1) 美術史学では、彫刻・絵画・工芸などの各分野において、素材別、技法別に分類され、基礎研究が積み重ねられてきた。

本研究で取り上げる厨子については、一般に荘厳具として位置づけられ、従来は工芸の分野に属するものとして取り扱われている。彫刻史研究にあつては、仏像に従属するものとみなされる傾向が強く、必ずしも研究が盛んで

あつたとはいえない。他方、絵画史においては、描かれた意匠を考察対象として、たとえば法隆寺蔵玉虫厨子や同寺蔵伝橘夫人念持仏厨子など、上代の重要作例についての研究成果が際立つのに対し、平安時代以降についての研究は低調といえる。このような状況は、当代における厨子そのものの遺品の少なさ、正確にいえば、考察に足るオリジナルが失われている現状と無関係ではないだろう。その点、中世以降の舍利信仰の高まりによって数

多くの作例が遺された舍利厨子など、比較的小型の厨子については、とくに工芸史の立場から興味深い研究がなされている。また、建築史の立場からは、建築形式の分類を主眼とした研究がおこなわれてきた。

(2) 一方、近年の彫刻史研究の動向を顧みると、礼拝対象としての像と儀礼の関係や、いわゆる生身仏信仰といった仏像の靈性に関わる問題が盛んに論じられるようになった。そうした観点から、像を納める厨子は、仏像の宗教的意味をより明らかにするうえで有効な材料であるといえる。第一には、儀礼との関わりを想定することで、礼拝対象としての機能を理解することができるからである。第二には、仏像の安置方法やその歴史の変遷に関わることから、古代・中世における仏像とその身体観の問題を議論する手がかりとなりえるからである。さらに、厨子の外観が宮殿や塔などをあらわすことから、仏堂内の礼拝空間をめぐる議論との重なりも想定される。

このように本研究は、仏像を中心とする空間において、周囲の荘厳がいかに関係を意味づけるかという視点に基づくものであり、彫刻・絵画・工芸などの美術史学各分野、あるいは建築史学や宗教史学などの他分野を横断し、総括することを必要とする。上述の研究動向と密接に関わりつつも、荘厳具である厨子への着目という従来の彫刻史研究にはない新たなアプローチとして、本研究は構想された。

2. 研究の目的

(1) したがって本研究の目的は、まず仏像の荘厳具としての厨子の役割を理解することにある。すなわち、厨子にあらわされた各意匠とその構成によって、仏像を中心とする一空間がどのように意味づけられたのかを明らかにすることである。たとえば、仏菩薩の諸眷属が集会する様や、来迎表現の演出、あるいは密教の曼荼羅に基づいた諸尊構成などからは、像を前にした人々がおこなった儀礼を復元することができる。このことはまた同時に、同種の仏画作例と比較することによって、絵画的にあらわされた世界観を立体造形へ翻案するという、彫像の表現上の問題をも内包している。

(2) 次に、そうした「みせる」ための機能を想定する一方で、器物としての厨子は、内容物を「かくす」という意図があることも、本研究の観点からは見逃せない。このことは、扉の開閉や厨子そのものの移動などによる、礼拝空間の限定化・流動化の問題を喚起する。

さらに宗教的概念の問題として深めるならば、仏像の秘仏化と身体観の問題へと導かれる。また、仏像自体も内部空間を有する容器としての正確を持つことを考えれば、像と納入品、あるいは鞘仏と胎内仏の関係も考察対象となる。

本研究の目的意識として、このような厨子の内外、安置仏とその内部という入れ籠状の空間構成を把握し、その宗教的意味を明らかにすることを主眼に置いた。

3. 研究の方法

(1) 厨子作例の意匠分析

本研究の立場上、中に安置する仏像の尊種の別に厨子の調査を進める。現存遺品の分布、研究代表者のこれまでの研究状況を鑑み、以下のとおり調査対象を分類した。

- ① 弥勒像を納める厨子
- ② その他の尊像を納める厨子
- ③ 舍利や経巻を納める厨子
- ④ 比較対象としての仏画作例

各モチーフの分析にあたっては、あらわされた尊像や種字のほか、とくに仏の靈性をあらわす意匠（光輝表現、雲文など）、仏の居場所をあらわす意匠（樹木、山岳、岩、州浜など）に注目し、仏教的世界観を明らかにする。

(2) 仏像納入品、胎内仏の研究

2で述べた研究の目的意識に基づき、仏像の外面的特徴とその内部空間の設えとの関係について、造像の願意を踏まえながら考察をおこなう。

(3) 仏像安置状況の歴史の変遷の検討

寺院資財帳、寺院縁起、巡礼記、年中行事記、近世地誌などを博捜し、仏像の安置状況の変遷について、儀礼などの使用方法や宗教的意味づけの変化に注目して検討を加える。

4. 研究成果

(1) 以下の作例について調査、閲覧、あるいは文献資料等で検討を加えた。

- ① 作品調査および撮影
神奈川・称名寺光明院伝来黒漆塗り厨子、同院蔵厨子入り弥勒菩薩小檀像、同寺蔵厨子入り金銅製愛染明王像、栃木・光得寺蔵厨子入り大日如来像、京都・蓮光寺蔵阿弥陀如来像、宮城・龍宝寺蔵釈迦如来像（清涼寺式）
- ② 作品閲覧ないし写真資料等による検討
京都・高山寺蔵鏡弥勒像、奈良・興福寺蔵厨子入り弥勒菩薩半跏像、

奈良・興福寺北円堂藏弥勒仏像および厨子入り弥勒菩薩像（胎内仏）

滋賀・延暦寺律院藏阿弥陀二十五菩薩来迎図厨子、

兵庫・鶴林寺太子堂、常行堂

奈良・伝香寺藏寺藏菩薩像および納入品、

京都・本覚寺藏阿弥陀如来像

静岡・新光明寺別院藏阿弥陀如来像

愛知・栄国寺藏阿弥陀如来半跏像、

同寺藏釈迦如来像（清涼寺式）、

京都国立博物館藏興福寺曼荼羅図、ほか

③ 史料調査（刊行本含む）

京都・蓮光寺藏『負別如来之縁起』、

『類聚世要抄』（マイクロフィルム）、

『山階流記』（以下刊行本）、『七大寺巡礼

私記』、『建久御巡礼記』、『諸寺縁起集』諸本、

『建保度長谷寺再建記録』ほか中世長谷寺史料、

『誓願寺縁起』諸本、ほか

上記の結果得た知見により、次の(2)～(4)に述べる個別の問題について考察を試みた。

(2) 弥勒像荘厳具と空間的位相

従来推定されていたように、称名寺光明院伝来の黒漆塗り厨子は、現在別の厨子に納められている弥勒菩薩小檀像を納置する厨子であった可能性が高いことが確認された。その場合、平安時代前期にさかのぼる古像を転用し、定印弥勒像として設えを新たに、像底部への舍利納入、飛天光背の後補、黒漆塗り厨子への納置がおこなわれたことが想定された。その空間構成には、鏡弥勒像などにみる弥勒曼荼羅の立体化や、舍利厨子などにみる尊勝曼荼羅の視覚化のありようが参照され、鎌倉時代の弥勒信仰・舍利信仰が思想基盤になっていると位置づけた。この内容の一端は空間史学会で口頭報告し、さらに科研報告書『兜率天往生の思想とそのかたち』（研究代表者泉武夫）に寄稿した報告において、附論として発表した。

(3) 生身阿弥陀像と造像作法

京都・蓮光寺と仙台市泉区川崎阿弥陀堂に伝来した二体の阿弥陀如来像にまつわる伝承について考察した。これによれば、京都で造られた阿弥陀霊像を東国へ運ぶ際、笈の中で二体に分身したという。笈を携帯用の厨子とみなせば、宗教的奇跡の起こる舞台装置としての厨子という一機能をみることができる。

また、蓮光寺の現存像は、『負別如来之縁起』に語られる造像作法からも窺えるとおおり、仏の具体的な外見的特徴をあらわした、いわゆる生身阿弥陀像として造られたことが指摘できる。この種の像はまた、胎内に五臓などの特殊な納入品を施す例が多く見出され、蓮光寺の像内調査（X線写真撮影）について

は今後の課題とした。

本内容に関連して、「笈分／負別如来」考一快慶伝承の一例として」と題した論考を、『論集・東洋日本美術史と現場-見つめる・守る・伝える』に寄稿した。

(4) 霊験観音像の受容過程

史料考察により、仏像の安置状況の歴史的変遷について広く知見を得た。現存作例に拘わらず、歴史上の霊像がいかんにしてその霊性を獲得していったのか、という観点から興味深い一例として、興福寺西金堂の霊験観音像が挙げられる。

平安時代初めに客仏として施入されたとみられるこの十一面観音像は、修二会本尊として悔過儀礼に用いられるようになり、平安時代後期には宝帳が懸けられ秘仏化したことが確認できる。すでに中世文学研究者から指摘があるとおおり、その過程で、地中湧出の霊験譚や光明皇后分身説、法華寺藏同木説などが付与され、「霊験観音」「生身観音」などと位置づけられていった。像自体は現在失われたが、興福寺曼荼羅図や春日曼荼羅図諸本で描かれており、中世以降の信仰の広がりも跡づけることができる。

こうした仏像安置の資料収集は、今後継続的に進めていき、データベース化したいと考えている。

(5) 今後の展望-建築空間における厨子

本研究では、結果的に比較的小型の厨子を取り扱った。それにより、観想や悔過、臨終行儀などの儀礼に用いるための、厨子の携帯性、臨時性といった性格が導き出された。一方で、一堂宇の中尊として安置された、比較的大型の仏像およびその厨子と建築空間との関わりが課題として残った。

この課題については、本研究期間中に、三菱財団助成金（人文科学）を獲得し、研究を進めている（「日本古代・中世における厨子と東アジア-意匠・意味・流通に関する対外交渉史的学際研究」、研究期間：平成23年10月～平成25年10月）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

①海野啓之、仏像光背考-仏教彫刻の霊験性と“空間史”、空間史学会（第2回）、2011年2月15日、東北大学大学院文学研究科

〔図書〕（計1件）

①海野啓之、他、竹林舎、論集・東洋日本美術史と現場編集委員会編『論集・東洋日本美

術史と現場-見つめる・守る・伝える』、2012、
pp. 254-271

〔その他〕(計1件)

報告書

①海野啓之、弥勒彫像荘厳具にみる平安後
期・鎌倉時代の弥勒信仰-醍醐寺三宝院弥勒
菩薩像光背における空間的位相、平成19~22
年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成
果報告書『兜率天往生の思想とのかたち』
(研究代表者泉武夫)、2011、pp.71-96

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海野 啓之 (UNNO HIROYUKI)
東北大学・大学院文学研究科・助手
研究者番号：80587759

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

塚本 麻衣子 (TSUKAMOTO MAIKO)
東北大学・大学院文学研究科・博士課程後
期3年

高橋沙矢佳 (TAKAHASHI SAYAKA)
東北大学・大学院文学研究科・博士課程後
期3年

深沢麻亜沙 (FUKASAWA MAASA)
東北大学・大学院文学研究科・博士課程後
期2年